

小中学校の道徳の時間が教科になり子どもたちの道徳性を評価するらしい

労働者委員 原園正敏

学校の「道徳の時間」を「特別の教科 道徳」という名称に変え、教科にする準備が進められているという。文部科学省の検定教科書を使用し、指導要録に評価欄を設けて、子どもたちの評価もするらしい。国語や算数といった他の教科と違い、子どもの道徳性を数値で評価するのは好ましくないので、記述評価をするのだそうだ。

知り合いの英語の先生に聞いてみた。「日頃の学校生活の中で、あまりお利口さんではない子どもが、英語の授業ではよく発言もし、テストの点数もいとしたら評価はどうしますか?」。同じ質問を数学の先生にも理科の先生にもしてみた。3人とも、「いい評価をつける。」と答えた。当然のことだろう。教科の評価と普段の素行は直接的には関係がないのだから。

では、道徳が教科になり、評価をするとしたらどうなるだろう。評価をされることによって、子どもたちは本音では違っても、授業の中では先生が求める「正解」を言うかもしれないことは、容易に想像できる。道徳の授業の中では、教科書に沿って模範的な答えをする子どもが、日頃の学校生活では、あまりお利口さんではなかったとしたら、先生はどんな評価をするのだろうか。道徳の時間の子ども様子だけで、評価をするのだろうか。それとも、子どもの普段の行動を含めて、評価をするのだろうか。普段の行動も含めて評価するとなると、先ほどの3人の先生の教科の評価との矛盾が生じる。

「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」の報告を見てみると、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育で養われる道徳性つまり子どもたちの普段の行動は、これまで同様、指導要録の「行動の記録」欄に記すことになっている。そうであるなら、道徳の評価欄では、やはり「特別の教科 道徳」での子ども様子を評価するのだろうか。

道徳性というものは本来、日頃の学校生活全体、家庭・地域の生活全体の中で養われるものであると思う。道徳を教科にし、指導要録に教科道徳の評価欄を新たに設けることの理解に苦しむ。だからこそ、数値評価ではなく記述評価にせざるを得なかったのだろうか。だが、たとえ記述評価であったとしても、こどもの本当の内面や道徳性をそう簡単に評価できるものではないだろう。行動や態度など表に現れた様子を評価するのであれば、現在の行動の記録欄への記述で十分だ。わざわざ指導要録に道徳の評価欄を設ける必要性を感じない。

ところで、道徳の検定教科書と聞くと、戦前の「修身」の国定教科書を想起するのは私だけだろうか。学校から「修身」がなくなった後、「道徳の時間」が誕生するまでの歴史を少し調べてみた。戦後、政府は戦前教育の反省のもとに「修身・国史・地理」に変えて、目の前にある実社会生活をもとにした経験主義・問題解決主義にもとづく「社会科」を誕生させた。当時の学習指導要領では、「今後の教育、特に社会科は、民主主義社会の建設にふさわしい社会人を育て上げようとするものである」としていた。その後、1950年に文部大臣が、「修身の復活」を表明し、1955年には経験主義・問題解決主義に基づく「社会科」を系統主義(地理・歴史・公民)の3分野に転換した。さらに、1957年に文部大臣が「修身」という言葉に変えて、初めて「道徳」という言葉を使い、道徳について学習する独立した教科の設置を表明し、1958年に「道徳の時間」が新設され、現在の教科化へとつながっている。

「ビートたけし」こと北野武氏は、著書「新しい道徳」の中で次のように書いている。「道徳は将来の理想的な国民を育成するための道具ではない。1にも2にも、子どもの成長や発達のためのものだろう。今の道徳教育は、子どもはこうあらねばならないという型がまずあって、その型にむりやり子どもを押し込めようとしているみたいだ。」

国家が「道徳」を声高に叫ぶとき、それは、古今東西、民衆にとっての「道徳」ではなく、国家のための「道徳」であることは、歴史が物語っているが、はたして、このような心配は無用の心配だろうか。専門家会議の報告には、次のような記述がある。「道徳教育の本来の使命に鑑みれば、特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。むしろ、多様な価値の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」。本当にそう願いたいものである。